

30 マルケス「百年の孤独」に関わる始末記

（6月末にマルケスの「百年の孤独」が文庫化。たいへん評判になっていますが、10年前〔教諭時代〕に書いた文章を今回そのまま載せることにします。それでは、どうぞ）

高校時代の私は馬鹿であった。しかし、それを隠そうという恥じらいがあったので、大学ではインテリのふりをしようと決めていた。インテリぶるなら、映画を観るなら角川映画ではなくゴダール、音楽はヒットチャートではなくクールジャズ、雑誌は朝日ジャーナルで、本ならガルシア＝マルケスだった。なぜ、マルケスかというと、丁度その頃、寺山修司が映画化した、インテリ学生が好みそうな難解な映画「さらば箱舟」の原作が、マルケスの「百年の孤独」だったからである。

大学では本を読む時間はたっぷりあったがお金が全くなかったので、「百年の孤独」は大学の図書館で借りることにした。しかし、私はそれを借りることはできなかった。というより、借りる自信がなかったのである。手にしたその本は、専門書のような味気ない表紙に、中を開くと上下2段にぎっしり文字が詰まり、会話文が極端に少ない上、登場人物の名前はカタカナ10文字以上だった。新潮文庫の100冊やハヤカワの探偵物ぐらいにしか世界文学になじみのない者には、全く歯が立たない代物であった。例えるなら、バドミントンラケットの代わりに「しゃもじ」を持たされ、林先生（当時の同僚。バド顧問）に挑めと言われたようなものがある。当然「参りました」なのである。アメリカ文学さえほとんど読んでいないのに、いきなりラテンアメリカ文学のはずがないのである。

その後の大学生活の中で「打倒マルケス」に燃え、プルーストからフォークナーまでさまざまな世界文学を読破した。というのは全くの嘘で、当時「ダブル村上」と言われていた「龍」「春樹」にうつつを抜かすのが関の山で、結局マルケスは遙か彼方にあるままだった。さらに大学卒業後、国語教師になったので、それなりに本は読んでいたが、「先に読むべき本がある」と自分に言い訳をして、「百年の孤独」を手にすることはなかった。

しかし、大学卒業から10年、その改訳版が出た際、ついに読む時が来たと感じた。改訳版になると、驚くほど読みやすくなるのが常だからである。さらに、この手強い本に挑むのに万全を期し、テレビとも家族とも隔絶した中、この一冊のみ持参し、学習合宿中のすき間時間に読み切ろうと考えた。つまり、「読まざるを得ない環境」を作り出したのである。しかし、そこまで自分を追い込んだにも関わらず、どうしても20ページ前後から先に進めないのである。結局、合宿の帰り道、重い足取りで町の図書館に本を返しに行ってしまった。「我慢して読むことが真の読書なのか」という哲学的な言い訳で自分を納得させたが、野球で例えれば「ノーヒットノーラン」の完敗だった。

それからさらに15年、今年（2014年）4月、マルケスが死んで、多くのマスコミが改めて彼の功績を称えた。始めの挫折から30年、3度目の挑戦の時が来たのである。生徒諸君、こころせよ、世界は広く、文学の海は深い。大人でさえ挫折する本が、世の中にはたくさんある。私も頑張る、君らも頑張れ。時に本の世界では背伸びが必要である、好きな作家の本もいいが、時には知らない作家やジャンルに挑戦せよ。そして、挫折を通して、自らの未熟さを思い知れ。それが成長の一歩だ。

追伸。本校（当時の勤務校）にもある、トマス・ピンチョン「ヴァインランド」。彼の「重力の虹」は挫折すること、間違えなし。お薦めです。（西陵高「ペンリレー」より）

令和6年9月2日 大村城南高等学校長 中小路尚也